



TITLE:

花山だより

AUTHOR(S):

花山坊

CITATION:

花山坊. 花山だより. 天界 1934, 14(158): 299-299

ISSUE DATE:

1934-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165533>

RIGHT:

花 山 だ よ り

四月11日朝、天文臺のバスが蹴上げ附近を通ると、昨日までそんなでもなかつた櫻がすつかり開いて、動物園、インクライン、都ホテルの邊り、凡て花に覆はれて了つてゐる。で是非とも「一瓢を携へて」何處かへ杖を引かざる可からずと衆議一決。折柄の好天氣を機會に、午後2時頃から山を出發した。（前號花山坊の記事通り）

クツク赤道儀の使用者が段々増して來て、お互の協定等では不都合が起るので、今後は一週間分宛の觀測時間割を作る事になった。即ち一夜を宵、夜中、翌曉に三等分して觀測者が交代。月のない夜は寫眞觀測、月のある時は眼視觀測が主として行はれる。觀測者は目下の所次の5氏で、觀測の種類は山本先生が糸線測微器で彗星其他、柴田氏が寫眞で彗星や小遊星、小山氏は寫眞で變光星、稻葉氏は糸線測微器で二重星、宮本氏は遊星面の眼視觀測をされる。

四月17日の夜12時過ぎに觀測を終つた柴田先生が大赤道儀室から降りて來ると、觀測のため電燈を消してある筈の廊下が馬鹿に明るい。ハテ變だと外を見ると市内に火事が起つてゐる。それが又とてつもない大きな火焰で、到底普通の家が焼けてゐると思はれないで、寢てゐた臺員を起したと言ふ事ですが、之れが黒谷大本山の火事だつたので、上島先生の家には灰が澤山降つた由。最も近かつたのは黒谷の直ぐ下の池田氏の家で、本堂が焼け落ちた時は火塊で家が壓潰されるかと思はれた程だつた由である。（四月30日 星見山人）

花山といへば、外來者はすぐあの堂々たる本館の立關とその大ドームとを思ひ浮べるでせうが、しかし、永く花山に住み馴れたものには、むしろ宿舎から別館や子午線館あたり、いつもクロ（犬の名）が「ひるね」してゐるあたりが、なつかしみのある邊です、花山きつての寫眞師龜井氏に撮つて頂いた一枚の寫眞は、次號の表紙一ぱいに現はれます。なつかしい花山の氣分をよく表してゐますから、今から楽しんで下さい。

宿舎の食堂——すゝで黒すみ、壁が落ちて、アバラ家ではありますが、しかし毎日メンバ―が集つては座談に花を咲かせる此の食堂は、花山のアクチビチ―の參謀本部ですが、こゝに毎日龜井氏が新しい收穫としての美術寫眞をばり出されて、一同を喜ばせてゐます。（花山坊）